

関西におけるキャンプ場の分布とその特徴

河本大地 奈良教育大学社会科教育講座 (地理学)
志直千尋 スタジオアリス

Geographical Distribution and its Characteristics of Camping Sites in Kansai Region, Japan

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

Chihiro SHINAO

(Studio Alice)

Abstract

Geographical distribution and its characteristics of camping sites in Kansai (Kinki) Region, Japan, are examined on this paper. After making a database of 222 camping sites, the authors examine the geographical locations, scales, equipment and services of each camping sites. Additionally, interviewing surveys are conducted with 2 camping sites regarding their management. Camping sites in Kansai Region are often distributed in rural areas far from cities. Their equipment and services complement the inconvenient locations, especially in mountainous areas. These results suggest that making use of the regional diversity of camping sites is important to enhance roles of camping activities in our society.

キーワード：キャンプ場, 地域多様性, 自然, 近畿地方

Key Words : Camping site, Regional diversity,
Nature, Kinki Region

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

キャンプ場の歴史や役割をふりかえってみよう。日本キャンプ協会の会長を務めた酒井によると、日本のキャンプには2つの「源流」がある⁽¹⁾。ひとつは大阪YMCAが1920年7月に兵庫県西宮市の南郷山の松林で簡易天幕を設営し実施した教育的組織キャンプである。もうひとつは、東京YMCAが1922年に日光中禅寺湖畔の阿世湯で実施した、中学生対象のキャンプである。また、大出は、「日本で初めてキャンプが行われたのは、いつだったか、確実な資料はないが、1889年比叡山で外国人がキャンプ生活を行った、という記録がある」としている⁽²⁾。他にも、1911年に当時の学習院長であった乃木希典の提唱により神奈川県片瀬海岸で実施された学習院のスカウト式臨海キャンプを最初の教育キャンプであるとするものもある⁽³⁾。この頃のキャンプは、レジャーではなく、大自然のなかでの団体行動を通じた心身鍛錬の意味合いが強いものであった。このように、日本におけるキャンプ

のはじまりには諸説あるものの、近代国家の形成された明治期に行われた組織キャンプが「源流」とされることが多い⁽⁴⁾。そして、キャンプ活動には現在も、集団訓練や人間形成などの教育的効果が期待されている⁽⁵⁾。

一方、キャンプ場は、現代社会において都市部などで身近な自然が喪失していくなかで、自然との触れ合いを提供する場として需要が増しているとされる⁽⁶⁾。特に子どもの自然との接触の場として、キャンプ場は以前にも増して重要な役割を担っており、子ども同伴のグループには同伴していないグループよりも自然や不便さを求める傾向があることもわかっている⁽⁷⁾。そして、自然の中で楽しむという要素が、従前の組織的なキャンプよりも増大している。

とはいえ、レジャーとしてのキャンプが広まる中、キャンプ場内に自動車で乗り入れ、自動車の中や横で宿泊するなどの「オートキャンプ」が一般化している。日本では1960年代後半からモータリゼーションとともにこの動きが生じたが⁽⁸⁾、その後しばらくはあまり普及せず、1980年代以降急激に増加して1990年代中葉に約1600万人に達した

後、減少し、近年は700万人台で推移している⁽⁹⁾。この「オートキャンプ・ブーム」は、人々の「手軽な自然」志向によって成立していた⁽¹⁰⁾。現在このブームは沈静化しているものの、こうしたオートキャンプ場利用者の志向性はそれほど変わっていないと思われる⁽¹¹⁾。

このように、キャンプ場の社会的役割やキャンプ場利用者の特性については多くの研究が蓄積されているが、キャンプ場の地理的な分布や経営を扱った研究はほとんどない。しかし、分布にはキャンプ場経営者の判断や利用者の行動が反映される。また、キャンプ場の分布とその特徴の把握は、自然に対する人間の向き合い方の一端について理解を深めることにつながる。それは、上述の既存研究において、「自然との触れ合い」、「自然や不便さ」、「手軽な自然」といった表現が用いられていることから明らかである。さらに、分布とその特徴の把握は、各地のキャンプ場を十把一絡げにせず、地域事情・地域条件に応じた今後のキャンプ場のあり方を考える手がかりとなる。

そこで本稿の目的は、キャンプ場の分布とその特徴を明らかにすることとする。

1.2. 研究方法

研究対象は、関西（本稿では大阪府・京都府・滋賀県・奈良県・兵庫県・和歌山県を指す）のキャンプ場とする。とりあげるキャンプ場は、公益社団法人日本キャンプ協会に加盟しているキャンプ場、一般社団法人日本オートキャンプ協会に加盟しているキャンプ場を基本とするが、これらを補完するため株式会社KADOKAWAが運営する「全国のおでかけ&イベント情報をお届け！ウォーカープラス」に掲載されているキャンプ場も含める。いずれもテントサイトを有する箇所とする。コテージ、バンガロー、ロッジ等のみでキャンプ場を名乗っている箇所は含めない。

これらをデータベース化および地図化し、分布の傾向を把握するとともに、分布と設備やサービスの充実度等との関係を検討する。

そのうえで、2つのキャンプ場を事例に、聞き取りにより、季節ごとの経営上の工夫やオフシーズン対策、客層とその変化等について概要を把握する。

最後に、全体のまとめをおこなう。

2. 関西におけるキャンプ場の分布とその特徴

2.1. 分布

関西にあるキャンプ場がどのように分布しているのかを、地図化により確認する。図1を見ると、キャンプ場の大半が人口の少ない山岳地域や沿岸地域に分布していることがわかる。大阪平野や京都盆地、奈良盆地にはほ

とんど見られない。また、オートキャンプのサイトを持つ施設は、大都市から離れた地域に多く分布している。

滋賀県では琵琶湖のまわりに多い。これらをウェブサイトを確認すると、夏季のみ浜辺にオートキャンプ場を設置し、それ以外は温泉施設や民宿を経営している場合が目立つ。また、滋賀県のキャンプ場は、JR湖西線などの駅に近く利便性が高い場合が多い。そのため、車を持っていなくても楽しめるようになっている。

大阪府は、地図にあるように、キャンプ場が少ない。能勢町に5か所あるが、集中しているのはそこだけである。ほとんどが、オート区画を有していない。

兵庫県は、キャンプ場が多く、北部に集中しているのがわかる。夏場にキャンプ場として運営し、冬はスキー場になるところも多いようである。

奈良県は、天川村に13ものキャンプ場が集まっているほかは分散している。和歌山県は、海が近いところに集中しており、特に白浜町には7か所ある。マリンスポーツの場の充実と関係があると思われる。

以上のように、関西のキャンプ場は、北部と南部の山岳地域や沿岸地域に偏って分布している。その多くは都市部からの交通利便性があまりよくない。オートキャンプ場はそのような地域に多い。

2.2. ロケーションによる類型

前節でみたように、キャンプ場の多くは、山岳地域や沿岸地域に分布している。そこで表1では、府県別のキャンプ場数を、キャンプ場の近くに山・川・湖・海のどれが主にあるのか、どれを主に活用したアウトドア活動があるのかで分類しカウントした⁽¹²⁾。「湖」は、琵琶湖のある滋賀県に特有のタイプである。これらの類型は、次節以降の分析・考察に用いる。

表1 府県別にみたロケーションごとのキャンプ場数

	山	川	湖	海	計
大阪府	10	1	0	2	13
京都府	22	6	0	9	37
奈良県	5	22	0	0	27
兵庫県	29	8	0	28	65
滋賀県	19	0	22	0	41
和歌山県	28	3	0	8	39
計	113	40	22	47	222

2.3. 規模と施設・サービス充実度

キャンプ場の分布と、施設・サービスの規模との間に関係は見られるだろうか。施設・サービスについては、各キャンプ場における、トイレ、炊事場、テントのレンタル（貸し出し）、駐車場、主催するアウトドア活動、バーベキュー場、キャンプファイヤー場の有無、およびペット可かどうかを把握した。そして、それらをそれぞれ

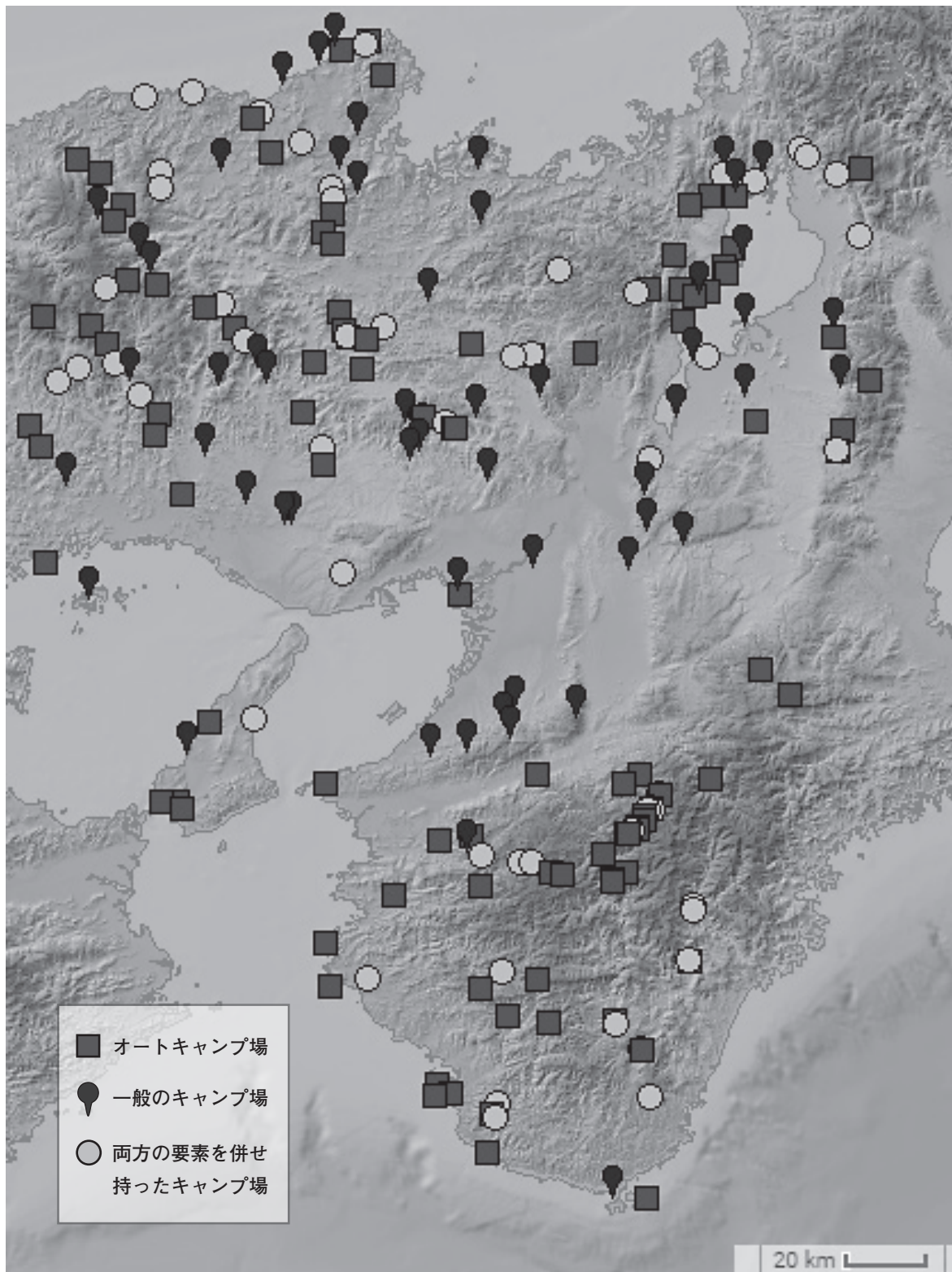


図1 関西におけるキャンプ場の分布

図の作成には、谷謙二研究室（埼玉大学教育学部人文地理学）ウェブサイトの「ジオコーディングと地図化」を使用。背景に地理院地図（色別標高図）を使用。

れ有していれば1, なければ0でカウントし, 合計を当該キャンプ場の「施設・サービス充実度」として示すこととする。

一方, キャンプ場の規模を把握することは難しい。本稿では, テントサイトの数を指標として用いることとした。ただし, 海岸や河原, 広場などにおけるフリーサイトの場合はカウントしていない。

図2では, 施設の規模と施設・サービス充実度の関係を散布図で表している。この図からは, 両者の間に顕著な関係はないことがわかる。関西のキャンプ場の多くは100サイト以下である。また, サイト数の多い施設ほど設備が充実しているというわけではないことも読み取れる。多くの施設には, トイレや駐車場など最低限必要な設備はそろっているため, 施設・サービス充実度はおおむね3以上となっている。

施設やサービスの有無に関して大きく異なるのは, 主

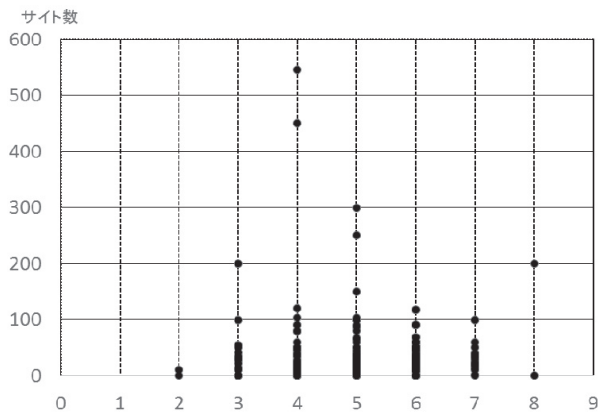


図2 キャンプ場の施設・サービス充実度とサイト数の関係

催するアウトドア活動やバーベキュー施設, キャンプファイヤー場の有無である。これらがあるのは, 222あるキャンプ場のそれぞれ半数にも満たない(図3)。ペット不可のキャンプ場も多く, ペット可のキャンプ場であってもロッジの中のみや, リード着用必須, 要相談などが大半で, ペット連れの利用者にとっては選択肢が狭い状況となっている。オートキャンプのテントサイトでは, 他の利用者の迷惑になる恐れからか, ペットを不可にしている場合が多い。

主催するアウトドア活動は, ほぼ半数の施設にある。特に山に分布するキャンプ場に多い。そこでのアウトドア活動の内容は, ウッドクラフトや火おこし体験などとなっている。川・海・湖といった水の近くの場合には, 釣りやマリンスポーツが多い。このように, その場所に足を運んだからこそできるアウトドア活動が提供されている。キャンプサイトのみ運営しているところよりも,

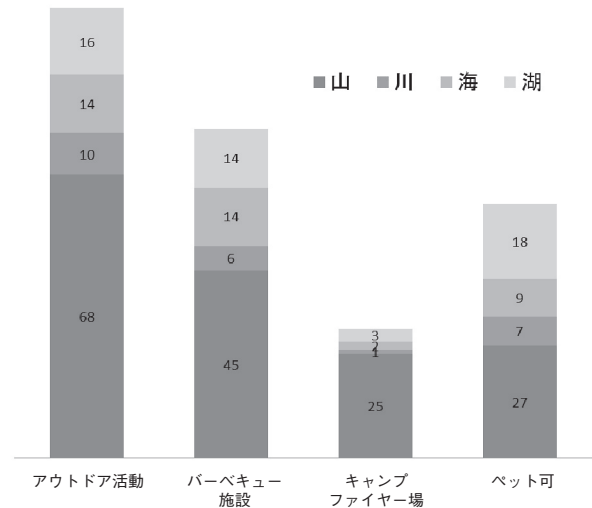


図3 施設・サービスごとにみたキャンプ場数

野外活動センターや施設が充実しているところで, アウトドア活動も充実している。

キャンプファイヤー場は, 31のキャンプ場のみにある。その多くは, 山・川・海・湖にタイプ分けした際の「山」に分布している。湖や海の近くにあるキャンプ場では, 特別な施設なしに浜辺でキャンプファイヤーが可能な場合もあるが, 山では木々が多いために場所が限られることが理由として考えられる。全体の数が少ないのは, キャンプファイヤー場が基本的に団体向けの施設であり, 個人客はあまり利用しないことに起因すると考えられる。

バーベキュー施設については, バーベキュー場として机やコンロを設置しているキャンプ場はさほど多くないという結果が得られた。コンロを持ち込み可としたり, 貸し出しをしたりしているところが多い。オート区画の増加も関係していると考えられる。

ペット可のところは, 山だけでなく, 海や湖に近いキャンプ場のオート区画にも多い傾向がみられる。

図4は, キャンプ場の施設・サービス充実度を地図化したものである。ここからは, 施設・サービス充実度の高いキャンプ場の大半が, 北部および南部の山間・山麓部に立地していることがわかる。また, 都市部に近いキャンプ場, 海岸・湖岸のキャンプ場は, 例外もあるが概して施設・サービス充実度が低い傾向にあることもわかる。

3. 事例に見る経営上の工夫

前章では, 分布図や類型化によりキャンプ場の分布とその特徴を明らかにした。本章では, その内容を補足すべく, 2例のみであるが, キャンプ場における経営上の工夫を把握する。事例は, キャンプ場のロケーションと

して最も多かった「山」に分類されているキャンプ場と、日本最大の湖であり関西の特色のひとつと言える琵琶湖の近くにある「湖」に分類されたキャンプ場から抽出した。どちらも年中無休で経営しており、施設・サービス充実度はそれぞれ7および6と高い。しかし、テントサイトは大森リゾートキャンプ場では一般の区画のみ、たからぶねファミリーキャンプ場ではオート区画のみと異なっている。

3.1. 大森リゾートキャンプ場

京都府京都市北区にある大森リゾートキャンプ場は、京都南インターから車で約1時間、京都駅からバスで1時間+送迎という位置にある。

主な施設として、テント区画40、丸太小屋（小3・大1）、バーベキュー施設やキャンプファイヤー場、放牧場や管理棟があり充実している。キャンプ施設は通年営業しており、四季により客層が変わる。春（4～6月）は、林間学校等の野外活動の利用者が多い。ゴールデンウィークの連休や休日には家族連れでにぎわう。夏（7～9月）は、キャンプ場の繁忙期とも言え、多くの家族や学生などでにぎわう。9月は、家族連れなどは学校が始まることで少なくなり、大学生のサークルなどの団体が多くなっていく。秋（10～11月）は、学生数が少なくなりキャンプが好きな高齢者が目立つ。紅葉が楽しめ、また涼しく過ごしやすいためである。冬（12～3月）は、キャンプ場としてはオフシーズンである。京都市内の観光を目的に宿泊だけする人もいる。

季節による客数変動を緩和するとりくみとして、京都駅までのマイクロバスを運行している。これにより利便性を高め、団体客のニーズに対応しようとしている。さらに、日帰りでの利用も増やしている。

また、季節性のあるとりくみを工夫している。例えばオフシーズンである冬にはジビエ料理をセットにしたプランを設けている。

大森リゾートキャンプ場は、民間で運営しているキャンプ場の中では歴史が長い。経営していくなかで、やはり繁忙期以外になると利用者も減り、キャンプ場運営だけでは厳しくなってくる。そこで、冬場はスキースクールなどを企画している。それでも、キャンプ場は年中無休で営業している。それはなぜなのか。繁忙期のみの営業や、副業としてキャンプ場をしているところが多い中、年中無休にすることで、利用者にもいつでも行けるキャンプ場としてのイメージが付き、多くの方に選んでもらいやすいとのことである。

しかし、大森キャンプ場ではオート区画を一切設けていない。それは、自然を感じるところに車はいらないとの考えによる。多少の苦勞をしてもらい、テント区画まで荷物をもっていってもらい、昔からのキャンプの形を

追求している。初めてのアウトドアをこのような形で体験できる施設にしていきたいとのことである。ただし、キャンプ場のマナーを知らない、あるいは守らない人も増えているという。

3.2. たからぶねファミリーキャンプ場

大森リゾートキャンプ場とは異なり、車を横付けできるオート区画のみのキャンプ場である。宝船温泉湯元ことぶきが、年中無休で管理・運営している。滋賀県高島市にあり、JR近江高島駅からタクシーで5分という便利などところにある施設である。設備はオート区画が100区画（砂地）、バンガロー2棟、コテージ1棟、管理棟がある。また、レンタルが充実しており、手ぶらで行っても楽しめる形となっている。ペットの同伴も可能である。

大森リゾートキャンプ場とは、季節ごとの客層も異なる。春は、大学のサークルやゼミなどの新入生歓迎会などで琵琶湖の浜辺がにぎわっている。夏は宿泊利用とともに、琵琶湖でマリンスポーツをする人が日帰りでオートキャンプ場を利用する機会が多い。秋・冬になるとキャンプ場の利用は少なくなってくる。しかし、温泉の利用が多い。たからぶねファミリーキャンプ場は、ふだん琵琶湖の浜辺として開放されているが、ホームページ限定のクーポンを出すなど、オフシーズンでも来てもらえるような工夫をしている。バーベキューセットの貸し出しをし、日帰りだけの利用も増えるようにしている。花火も22時まで可とし、多くの利用者、特に学生が楽しんでいる。キャンプ場への温泉の併設は珍しいため、キャンプ後に温泉も楽しむ利用者が多い。繁忙期以外は温泉の経営でなりたっている。

このように、たからぶねファミリーキャンプ場では、交通利便性と充実した施設・サービスでキャンプの初心者も多く獲得している。自然を楽しむというよりは、友達や家族との時間を楽しむ利用者が多い。

4. まとめと展望

本研究の目的は、関西のキャンプ場の分布とその特徴の解明であった。成果は以下のようにまとめられる。

1. 関西のキャンプ場の多くは、人口の少ない山岳地域や海岸・湖岸地域に分布している。
2. オートキャンプのサイトを持つ施設は、大都市から離れた地域に多く分布している。
3. キャンプ場の規模（テントサイトの数）と施設・サービスの充実度との間には関係がない。
4. 施設・サービスは、山岳地域にあるキャンプ場で充実している傾向がある。
5. 北部および南部の山間・山麓部に施設・サービス

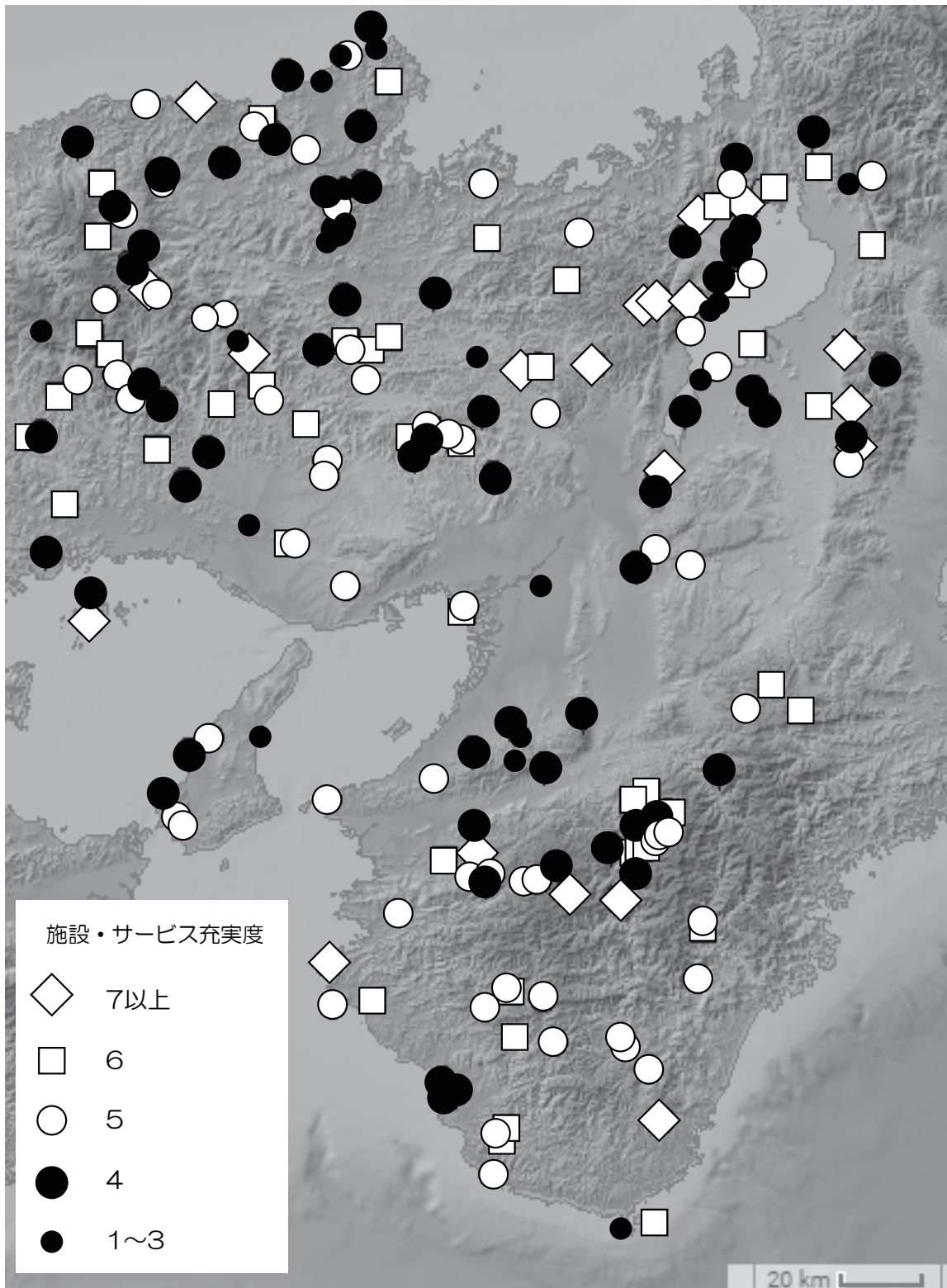


図4 関西のキャンプ場における施設・サービス充実度の分布

地図の背景に地理院地図（色別標高図）を使用。

充実度の高いキャンプ場が多い一方、都市部に近いキャンプ場、海岸・湖岸のキャンプ場は、概して施設・サービス充実度が低い。

6. 経営上の工夫に関する聞き取りからは、交通利便性の確保や施設・サービスの充実により、キャンプをよりカジュアルな形にし、利用者増を図ろうとする様子が見えてくる。

このように、関西のキャンプ場は都市部から離れた自然豊かな地域に多く分布している。そこでは、都市部からの交通利便性の低さを補うかのように施設・サービスの充実が見られており、その傾向は特に山岳地域において顕著である。

ただ、本研究ではキャンプ場の設置・運営主体や新古、訴求対象、魅せ方などによる分析はおこなっていない。分布の変化も見えていない。取り上げた事例も少ない。また、施設・サービスは他の要素を含めて考えることも可能である。これらは今後の課題である。

しかしながら、本研究で明らかになったキャンプ場の分布とその特徴には、キャンプ場の経営者および利用者の思いや行動が強く反映されていると考えられる。冒頭で見たように、キャンプ活動やキャンプ場の社会的位置づけは大きく変化しており、レジャーとしてのキャンプが、“手軽な自然”の中で行われるようになってきている。本稿で明らかになった、大都市から離れた地域のキャンプ場における施設・サービスの充実は、まさにこの傾向に対応していると考えられる。

とはいえ、それでよいのかは検討せねばなるまい。施設・サービスの充実を際限なく続けると、キャンプ場のもつ重要な資源である「自然」からの距離は遠のくし、経営者側の経済的負担も大きくなる。どこでも同じような充実した設備・サービスが提供されるようになると、特に都市部から離れた地域のキャンプ場や、経営基盤の脆弱なキャンプ場にとっては、持続可能性が課題となる。そして、キャンプ場そのものの存在意義も問われることとなる。

本研究の結果からは、都市部から離れた地域のキャンプ場であっても施設・サービスの充実度が低いものが見られた。事例研究では、あえてオート区画を設けず、なるべく素の自然を味わってほしい考えるキャンプ場も見出された。こうしたキャンプ場を持続可能とするためには、利用者側の「カジュアル志向」を認め、差別化を図ることが必要である。利便性を追求したキャンプ場はあってよいし、そうでないキャンプ場もあってよい。ビギナーや家族連れには、前者のほうがよい場合が多いだろう。しかしそこに、より自然度が高くて「不便」なキャンプ場の存在をも知らせるナビゲート機能を設け、時と場合に応じた選択ができるようになれば、多様なキャンプ場が共生できる可能性は大きくなる。稼げ

るキャンプ場が稼げにくいキャンプ場を支える仕組みも、日本キャンプ協会や各地の団体の検討すべきではないか。また、「不便」なキャンプ場が、ただ来客を待ち、そこでキャンプをしてもらっただけでなく、利用者に対するその地域のナビゲート役となることも大切である。そのためには、地域経営の中にキャンプ場をきちんと位置づける必要がある。キャンプ場を管理運営する組織が、地域内外の他の組織とタイアップして事業をおこない、新たな存在意義を創出することもできる。

これらは、単に都市部から離れた経営基盤の脆弱なキャンプ場の救済のみを意味しない。キャンプという活動、キャンプ場という場の社会的役割を、多様性をもった形で今後につないでいくことにつながる。キャンプを通じて自然の中での私たち人間のあり方を多くの人が考え、行動を起こしていけるよう、地域多様性を活かしたキャンプ場のあり方を構築していく必要がある。

[付記] 大森リゾートキャンプ場およびたからぶねファミリーキャンプ場の皆様に、聞き取りのご協力をいただきました。心より厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 酒井哲雄 (2002)：戦後の日本YMCAキャンプの流れとその系譜—1945年以降より—。サイエンスプレス。
- (2) 大出一水 (1986)：野外教育自然活動の計画と指導。遊戯社, p.14。
- (3) 松田 稔 (1978)：ザ・キャンプ, 創元社, p.19。日本野外教育研究会編 (1999)：改訂キャンプテキスト, 杏林書院, p.9。
- (4) 井村 仁 (2006)：わが国における野外教育の源流を探る。野外教育研究10-1, pp.85-97。ただし氏は、日本における野外教育の源流は基本的には登山であるとしている。
- (5) たとえば、佐野 豪 (1980)：子どものための野外教育—教育キャンプの今日的課題と実際—, 泰流社。小田 梓・坂本昭裕 (2010)：長期冒険キャンプに参加した不登校児の体験の意味づけに関する研究。筑波大学体育科学系紀要33, pp.227-231。
- (6) 高橋 進 (2010)：「自然余暇」の生成と危うさ。日本余暇学会余暇学再編プロジェクト編：レジャースタディー—余暇研究の転回—, 日本余暇学会, pp.33-44。
- (7) 高橋 進 (2012)：自然体験の場としてのキャンプ場利用者の意識と行動。共栄大学研究論集10, pp.265-285。
- (8) 日本オートキャンプ協会 (2009)：協会40年のあゆみ—新しいライフスタイルと文化の創造—, 日本オートキャンプ協会, p.13。
- (9) 日本オートキャンプ協会 (1997)：オートキャンプ白書1997, p.5, および日本オートキャンプ協会 (2014)：オートキャンプ白書2014, p.6。
- (10) 長谷川教佐 (2016)：新しい家族旅行としてのオートキャンプ—日本におけるオートキャンプ・ブームの発生要因について— (上), 麗澤大学紀要99, pp.51-57。
- (11) たとえば和田 (2008) は、キャンプを「単に宿泊の手段」とする場合と「キャンプそのものを目的とした」場合とに分け、後者をオートキャンプとして位置付け、

それを中心に「魅力とノウハウを紹介している」。前者は、「登山やトレッキングで宿泊施設がない山に入ったときの夜」や「自転車やオートバイでテントを持って旅をする」際を指す。後者は、「車で湖畔、高原、海などに出かけ、そこでゆったり時間を過ごしたり、バーベキューをしたり」するものであり、「タープ、テント、ツーバーナー、テーブル、チェアなど野外で使いやすい道具を用意して、設備の整ったキャンプ場を利用する」。これは「自然の中で過ごす気持ちよさを家族や仲間と、恋人と気軽に楽しもうというもの」である。これは、長谷川（2016）のい

う“手軽な自然”志向に合致していると言える。和田義弥（2008）：キャンプの基本がすべてわかる本、権出版社、p.20.

- (12) 和田（2008, pp.26-27）は、「キャンプ場のロケーション」として、「川」、「森」、「高原」、「湖」、「海」を挙げている。これらのいずれを選ぶかは、「キャンプで何をしたいか」によって変わるとされる。本稿では、このうち「森」と「高原」について、区別をつけにくいいため合わせて「山」としている。